

沖縄戦と住民迫害・虐殺

『沖縄県史 沖縄戦』を集中して読んで、はじめて知ったことも多かった。なかでも第四部「沖縄戦の諸相」第一章「住民の被害」は心にせまり、沖縄戦特有の悲劇を考えさせられた。一部だけでも書きとめておきたい。写真は第四部とびらに掲載。



5月27日、牛島司令官らが首里を脱出、30日未明に摩文仁に到着する。軍の戦闘を最優先し住民に犠牲を強いてきた第32軍は、敗戦の色が濃くなった南部撤退後も、その方針を変更しなかった。第32軍が南部へ撤退したことによって、南部へ避難した多くの住民たちが戦闘に巻き込まれ死亡した。また軍から壕追い出しや食糧を強奪され、ガマで泣く子どもや投降しようとした人、米軍に保護された人等がスパイ視・非国民視され殺された。このような事例は枚挙に暇がないが、いくつか紹介する。

45年6月頃、玉城村の西端壕では将校が「只今から、軍の命令を発表する、皆さんよく聞け、2時間以内に、一人残らず、この壕から、撤退せよ、さもないと殺されても責任はもてない。但し、食糧品は置いていくように」と命令、多くの避難民が壕から追い出された。

北部にいた兵士や敗残兵達は、スパイや非国民の名目で住民や避難民達を脅かし、食糧強奪や虐殺など残虐な行為を行った。「日本兵は毎日のように住民の避難小屋に食糧徴発にやって」きて、「お前はスパイだろう、敵に通じているだろう」と、時には刃物や手榴弾を振りかざし乏しい食糧を住民や避難民から強奪、中にはカンズメを持っているだけでスパイ扱いされて処刑された人もいた。

北部には日本軍に助けを求めようと多くの住民や避難民が集まったが、このような事件が頻発し、沖縄戦の前から様々な形で軍に協力してきた沖縄住民は、日本軍に対して「軍人は住民の安全を守るべきはずのものが、逆に無抵抗な住民を武器を持って脅迫するとは実に卑劣な日本軍であった」「一番こわかったのは友軍の兵隊でしたよ」との思いが広く共有されていった。そして多くの避難民・住民たちは「日本軍と米軍にはさまって」、6月23日以降も、餓死者を含め多くの犠牲者が出ることとなった。

以上見てきたような日本軍による住民迫害や虐殺は、けっして一部の日本兵の蛮行ではなかった。近代以来の軍部の沖縄県民観にも見られるように、日本軍には沖縄県民に対する不信感が底辺にあった。軍機保護法の下でそれは増幅され、さらに第32軍によ

っても住民をスパイ視し、警戒するようにとの通達が出され、日本軍将兵のなかに徹底されていた。そうした背景のもと、軍としての戦闘を最優先し、「軍官民共生共死の一体化」ということで民間人に対しても死を強いる思想を持っていた軍にとっては、軍のために住民を壕から追い出したり、その食糧を奪ったりすることも当然視されていた。また日本軍を批判する言動をおこなったとみなした者、米軍に保護されたり米軍への投降を促した者、その他、非国民やスパイと見なした住民、それどころか小さな子どもたちまでも多数虐殺した。そうした事件は、日本軍が駐留していた離島はもちろん、沖縄本島の各地でも起こっている。特に、日本軍が首里から撤退してきた6月の南部において壕追い出しや食糧強奪、住民虐殺が頻発した。投降しようとする軍人軍属や民間人も多数殺された。民間人の生命を軽視し、軍を最優先する思想は、米軍に追い詰められ軍民混在するなかで極端なまでに肥大化したのである。

そうした住民蔑視意識を植え付けられていた兵士たちの場合、部隊から離れて敗残兵となってからもそうした残虐行為をおこなった。そうしたことも合わせて考えると、こうした残虐行為は日本軍による組織的なものと言えるだろう。

(2017年10月17日)